

認定こども園 星の子保育園
令和3年度 自己評価・施設関係者評価 報告書

1. 園の教育目標

<教育・保育方針>

- ・子ども一人ひとりを大切にせる教育・保育
- ・子どもたちのより良い今と未来につながる生きる力を育む

<具体的な目標>

- ・主体的・意欲的に行動できる力を身に付ける
- ・遊びや活動を通して総合的な生きる力を育む
- ・社会の一員として望ましい資質（社会性）を育む
- ・基本的生活習慣の自立を育む

2. 施設関係者評価委員会の総評

令和4年3月15日に評価委員6名が同席の上公開保育を実施するとともに、今年度の本園における目標と取り組み状況の聞き取りを含めて施設関係者評価を行った。

子どもと歩んだ年数を感じさせる園舎は決して新しくはないが、きれいに手入れされ年数を経たからこそ得られる美しさがある。園庭も品よく手入れされていて、たくさんの木々と構造物の配色の妙により、大衆がイメージする園庭とは大きく異なり、さながら「庭園（ガーデン）」といった風合いである。琵琶湖を一望できるこの「庭園（ガーデン）」での何気ない日々は子ども達にとって、故郷を愛する気持ちを育むことであろう。

この園内環境を支えているエッセンスはセンスと経験と責任感に他ならないと思うが、何より発信した信号を子ども達が受け止めて、返してくれるという信頼が根底にあることを感じた。

保育室はさらに子どもへの愛が前面に表現されている。この園で言う愛は子どもに日々の選択を委ねるといふ、言わば「見守る」といふ愛である。本園には保育者から一方的に提案される遊びは存在せず、多種多様なおもちゃ、素材、機会を子ども自身が選び突き詰めていくという遊びの方式がとられている。真剣なまなざしで時間の定めなく積木に勤しむ子どももいれば、友人とカードゲームに興じる子どもも、ひたすら絵の具を混ぜて新しい色を作り続けている子どももいる。保育者は温かい眼差しでその様子を見守りつつ、的確なタイミングで子ども達の遊びが発展する要素を与えている。その様子は押しつけがましくなく、子どもが自分で気付いたと思えるような何気ない声かけである。本当に必要なタイミングで紡がれるその言葉が、「見守る」といふ本来の意味を体現しているようで大いに関心させられた。

また、驚くほど静かな園内も保育者のスタンスの賜物だろうと感じた。言葉遣い、動き、子どもへのかかわりなど全てが丁寧であるため、自ずと子どもの所作も丁寧になっていったのであろうと推察される。

今後とも弛まず、多くの園の目標としてあり続けることを切に願うばかりである。

3. 本年度重点的に取り組む目標（評価項目）と自己評価及び取り組み状況

| | 目標・取組内容（評価項目） | 評価 | 取り組み状況 |
|---|--|----|---|
| 1 | 自然を活用した環境を充実させ、園庭の環境整備や室内での自然物の活用を促進し、子どもが自然に親しむ機会を充実させる。 | A | 園庭に植樹を行い、芽吹く緑や花・実、またそこに集う生きものとの出会いが増加した。 保育室内においても、保育者が自然物を積極的に取り入れ、より豊かな保育環境を提供することができた。 |
| 2 | 子どもの自己肯定感を育むことを目標に、指導計画案を改定し、日々クラスにおいて検討し、肯定的支援を高め、関わりの工夫を充実させる。 | B | 毎月の指導計画の中に自己肯定感に関する項目を追加したことにより、保育者が本視点について定期的に振り返ることができた。 流動的に変化し、時にゆったりと関わることに困難を感じる場面においても、子どもの自己肯定感を育むことを念頭ににおいた支援を行うことができるよう、さらなる習慣化を図っていきたい。 |
| 3 | ノンコンタクトタイムの達成率向上による保育の質向上 | A | ノンコンタクトとしての記録や計画、会議を行う時間を確保するため、ノンコンタクトシフトを作成し、達成率の向上を図った。 これにより達成率が向上するとともに、その内容の充実を図り、結果として保育の質向上を推進することができた。 |
| 4 | 保育に関する記録のあり方の検討・見直しの推進 | A | 本年度より運用している計画及び記録としての Learning Story では、子ども一人ひとりの「夢中になっていること」や「気持ちを表現していること」などのありのままの姿に着目して、その子らしい「今ここ」を見出だし、その可能性を伸ばしていこうとする、肯定的な観察と記録の方法として取り組みをすすめている。 これにより保育者の子ども理解の深まりや、保育者チーム内でのコミュニケーションが活発化し、保育の質向上を企図した業務の再構築へとつながった。 |